

青梅市文化財ニュース

第315号

平成26年1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 Tel0428-23-6859）

中武馬車鉄道

青梅市内で「鉄道」と言えば、ほとんどの人は「青梅鉄道」（青梅線）を思い浮かべるであろう。青梅鉄道は明治27（1894）年に開通した鉄道の、翌年からは日向和田駅（現在の日向和田保育園）まで延長され、北方の山地で採掘された石灰石を搬出した。貨車や客車を牽引したのは、蒸気機関車であった。青梅鉄道とは別に、明治34（1901）年に青梅から扇町屋（現・入間市）を経て、入間川町（現・狭山市）まで、鉄道が開通した。鉄道の名称は『中武馬車鉄道』で、会社組織は株式会社であった。



中武馬車鉄道株式
会社の印

中武馬車鉄道は、明治32（1899）年8月、埼玉県入間川町で五人、同金子村で三人、西多摩郡青梅町で四人、同霞村で三人など、合計二十人が発起人となって設立された軽便鉄道であった。明治34（1901）年1月に認可され、9月1日には全線が開通した。

起点は青梅・森下にある岡崎商店前（森下停車場）で、そこから青梅街道を東方へ向かい、西分交差点の西側に坂下駅、さらに東方へ進み師岡追分に師岡駅、そこからは町屋街道に沿って東方へ進み、大門の交差点に大門駅、さらに東方へ進み七日市場に七日市場駅を置いた。七日市場駅からは原今井を通過して金子橋を渡って埼玉県に入り、そこからは金子橋駅・西峰駅・三ツ木駅・根岸駅・小谷田駅・扇町屋駅・黒須駅・鶯ノ木駅・入間川駅を経て、終着は入間馬車鉄道停車場であった。全延長は約18.5kmである。

牽引が重い蒸気機関車の場合は、線路もそれなりの構造にする必要があるが、馬が牽引する軽便鉄道では、線路の設置はレールが細く、枕木も少ないなど、簡単な構造であった。中武馬車鉄道では、客車は12人乗りが10台、無蓋貨車13台、有蓋貨車2台で、27頭の馬が牽引した。

発着時刻表によると、一日の運行は午前中5便、午後5便の、計10便である。

青梅（森下）停車場の始発は4時50分で、入間馬車鉄道停車場駅には7時13分に着く。

所要時間は2時間23分である。最終は17時10分発で、入間馬車鉄道停車場駅には19時45分に着く。単純に計算すると、平均時速は約7.76kmである。一方、入間馬車鉄道停車場駅の始発は5時05分で、青梅駅には7時55分に着く。所要時間は2時間50分である。最終は18時15分発で、青梅には20時55分に着く。単純に計算すると、時速約6.53kmである。向かう方向によって平均時速が異なるのは、青梅が標高約215mであるのに対し入間川は標高約55mで、高度差が約160mもあるためである。

沿線地方における経済の活性化を期待して運行が開始されたが、資本金7万円に対し、初年度は収入が約3,306円、支出が9,475円で、6,169円の欠損であった。翌年も約5,980円の欠損、明治37年には上半期のみで約3,965円の欠損になり、以降も欠損が続いた。そのため、明治40年7月には青梅駅から師岡駅までを廃線にしたが、経営は赤字状態が続いたため、大正9（1920）年9月には、全線が廃止されてしまった。

現在、往時を記録しているものは無い。わずかに、起点であった森下の岡崎商店に駅名を書いたモニュメントが置かれ、大門の交差点にあるコンビニエンスストアの屋号が「停車場」として残っている。

（文責 角田 清美）

